

Title	日英交通史之研究(武藤長藏著, 内外出版印刷株式會社發行)
Sub Title	
Author	會田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1943
Jtitle	史学 Vol.22, No.1 (1943. 9) ,p.65- 67
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430900-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

と云ふ。明治天皇の東幸後に、この三方の樂人の中より召に應じて東京に永住し子孫今日まで宮廷に奉仕してゐるのである。宮省内にても始め雅樂寮、雅樂局、雅樂部を設けられ、明治十八年三月より大震災まで牛込見附内に雅樂稽古所があり、後年、洋樂が加へられて樂部に改稱され、今日に及び、舊本丸内に壯麗な舞臺を有する廳舎である。

雅樂には三管共に四大曲即ち蘇合、萬秋樂、春鶯囀、皇靈があり、之れを皆傳されると一人前となるのである。又神樂にも笛と簞篥に庭療の音取上ほびとねぢ祕曲があり、其の奉仕は山井、安倍兩家と定まつてゐた。

宮中に於ける御祭典には神樂と云ふものは大切で、新嘗祭の外、紀元節、十二月十五日、先帝祭の三祭典の「御神樂ノ御傳」は仲々莊嚴なものである。殊に新嘗祭の神樂は特別のもので午後六時より翌日の午前一時過までの長時間、恐れ乍らこの間聖上には御親祭であり、他の時は其の儀の濟むまで概ね夜の十二時半頃まで御寝遊ばされぬである。これ等のことは存じ上げぬ人が多い。評者は昭和御大禮に際し掌典部に兼務し、大嘗祭の御儀より各御神樂の儀を拜するの機會を得たので、本書を読み追憶の念を一層深くし寔に感慨無量である。

日本交通史之研究
武藏外出行會株式會社發行著

た節の苦勞談等興味津々たるところも少くない。終りに著者の老健を祈り、更に今回に述漏れのものなどをまとめて續篇の類の上梓を希望して止まないものである。(昭和十八、四、十一、警戒警報解除の報を聞き、讀後の記憶を記す。武田勝藏)

日本交通史之研究（武藤長蔵著）

（内外出版印刷株式會社發行）

武藤博士の日英交通史研究は既に久しい。紙上にその成果をみるやうになつてからも、恐らく十數年を経過するであらう。初版「日英交通史之研究」が、さうした多年の研鑽の集大成として公刊せられたのも、顧みればはや五年前のことである。當時筆者はこれを本誌上(第十六卷第三號、昭和十二年十一月)に紹介して、その末尾に著者のこれまでの研究に對する多大なる盡力に深く敬意を表すると共に、進んではかくの如き著者の終始たゞまざる努力が一層輝かしく結實するの日を衷心より祈つて置いたが、果せるかな、その後凡そ二歳にして昭和十四年一月、同氏はこの著を主論文として經濟學博士の學位を得られた。その審査委員たりし本塾經濟學部教授高橋誠一郎、野村兼太郎兩博士の審査要旨(三田評論、昭和十四年二月號參照)に曰く「著者武藤氏が長年に亘り倦むことなき努力に依つて、日英交通史料の蒐集をなし、それを一々検討攻究し、從來何人も想到せざりし若干の問題を指摘ある。」また「吾人は本論文並びに著者の過去の諸業績に照して、

著者武藤氏が經濟學博士の學位を授與されるに十分なる學識を有することを確認する」と。眞摯なる學者の榮譽として同慶に堪えない次第である。

しかし博士の烈々として盡くることなき探究心は、一刻と雖も止まることを知らず、その學者的良心と學究的態度とを以て、初版の刊行をみるや、直にその足らざりしところを補ふ準備に着手されたといふ。かくてここに昭和十六年一月改訂増補第二版の發兌を見るに至つた。

この改訂増補版には、主として「日英交通の研究に貢獻せし幕末及明治時代の日英交通史上の三英國外交官」及「西曆千六百六十一年の英葡結婚條約」の二編が、それぞれ第六編、第七編として増補せられてゐる他、巻末に「日英交通史略年表」をも添へて、初版に比し頁數にして約百頁、圖版また十葉を加ふ。「日本交通の研究に貢獻せし幕末及明治時代の日英交通史上の三英國外交官」なる一編は、明治聖德記念學會設立二十五吸年記念論文集「日本文化史論纂」(昭和十二年十一月發行)所載のものを加筆訂正して再録したもので、即ち文久二年(一八六二年)に來朝せしサトウ(Sir Ernest Satow)、元治元年(一八六四年)に來朝せしアストン(William George Aston)及慶應二年(一八六六年)に來朝せしアルジャーノン(Algernon Bertram Freeman Mitford)の三英國外交官について、簡単な年代記と日英交通史研究上留意せらるべき諸著文獻等を紹介し、更にその意義を鮮明してをり、「西曆千六百六十一年の英葡結婚條約」では、英國が同條約によ

つて宗教上德川幕府の最も恐れてゐた葡國と特別な關係を結べる理由から、共々幕府に懸念せられるところとなつて、千六百七十三年五月長崎入港のリターン號により齋らせるその對日通商再開の要求が拒絶せられる要因或は口實を爲したといはれるこの條約の正文英譯を京都帝國大學所藏 British and Foreign State Papers. Vol. 1. part 1. London, 1841. pp. 494—501 から寫し取つて掲載し、それに多少の所見が述べられてゐる。前者は初版が第二編日英交通史料の部を除いては概ね初期の關係にのみ重きを置かれた憾みを補ふものとして意義ある増補といふべく、後者もその重要史料の提示は、國際法外交史研究上の貢獻とせられる。また五七八頁以下に收錄せられた史學會第三十八回大會國史部會に於いて發表の「英艦イカルス號事件及イカルス號航海記」も、日英關係史上興味ある一挿話である。

(追記)——本稿の印行に先立つて、先般新聞紙上に博士の逝去を知らされた。それは我が經濟史學界にとつて少なからざる損失であつたらしい。筆者は本書の刊行に際して、博士からそれに對する感想を問はれながら、當時病床にあつて折角の需めに應じられざり來たこと等もあり、この計報をまたいたく遺憾とした。それせらるべき諸著文獻等を紹介し、更にその意義を鮮明してをり、につけても、ここに今更の如く博士の著作を繙いて、その學者の

良心と探究心の強さに打たれずにはられない。

博士が極めて多岐に涉る史料の蒐集とその綿密縷々たる考證とに長じてゐたことは定評である。否、稍もすれば、それは寧ろ度を過すとさへ思はれる程のものであつた。かりに博士の論著に難を稱へるものありとせば、それは屢こうした博士の飽くなき史料

探究の過度の丹念さについてであつた。時には本文を凌ぐくらゐ多くの註を付けたりするその書振りの煩雜極まことが、人をして暗に博士の居所たりし長崎で拵へるお雑煮みたいだといはしめたこともある。博士の著作にみる記述の煩頑は確かに讀者をして往々困却せしめたであらうし、論旨もそれがために自ら稀薄となる傾きを免れなかつたやうである。研究も深まる代りに前進が鈍るといつた嫌ひが多分にあつた。その著が概して一編を貫く主張や明確なる結論を訴へることに乏しいと思はれるのも、かかる事情の故にであつたかも知れない。しかもそれがまた博士の眞骨頂でもあつたのである。

一の主張を披瀝し、一の結論を導き出すには、ゆるぎなきそ

據りどころがなければならない。歴史を書くためのさうした據り

どころは嚴密なる史實の穿鑿であり、史料の究明であらう。博士

が常に先づ努めたのがこれであつた。本書中の第三編「日英交通史料」は正にその最も傾倒せられたところなのである。史書は時代の推移に伴つて書き改められることがある。史實そのものが變化を來すわけでは勿論ない。書かれた歴史の觀點に相違を生ずるのである。史料の探究に専念する最も基礎的な科學的純歴史研究

の立場は實にここに重大な意義を持つ。かくして鮮明せられた史實は書き直される必要がないからである。それは常に後學の發足の足場となることが出来るのである。「日英交通史料」は本書中の壓卷と思はれるが、その眞價も即ちここに存するといはなければなるまい。

或は博士の行手には、尙ほこの自ら礎いた足場に立つて博士獨自の史觀による日英交通史を執筆すべき任務が残されてゐたといふべきかも知れないが、惜むらくは、天博士にその壽をかさず、博士また人壽の限りあるに超然として些か枝葉に關はり過ぎた恨みなしとしない。しかし、これを以て直に博士の業績を左右せんとするのは勿論早計であらう。

學者の道、學問のしかたは必ずしも單一ではない。學者が自らの主觀的興味に耽溺して全く實社會から隔離するのをよいことだけは決していいはない。ただ一切を研究に没入しつゝ顧みないだけの情熱はなければならない。その意味で武藤博士の探究心は尊ばねねばならぬと思ふのである。（昭和十七年八月　會田倉吉）

フレー金枝篇（永橋卓介刊譯）

今日民族學を口にするものにして、フレーザーの名を知らぬものはないであらうし、フレーザーの名を口にするものにして、その名著金枝篇をしらぬものも、おそらくないであらう。それほど金枝篇は、斯學の古典とされてゐる。しかしその決定版は本文十卷であり、それに索引及び文獻目錄一卷、補遺一卷が加はつて、